

いま伝えたい

——被爆者から

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ

70年前の8月9日の朝、いつものように賑やかに、楽しく朝食をすませ、私は友だちの家に遊

私は、爆心地から500メートル離れた城山町で小学校3年生(8歳)の時に被爆しました。両親と兄弟7人の大家族で、幸せに暮らしていました。
1945年8月9日11時2分、原爆が投下され、一瞬にして街も、家も、人も、炭のように焼かれて、人びとは一口の水も飲まず亡くなったのです。爆心地から1キロ以内は生きている人はいないと言われていました。
私の家族も何も言わず、姿も見せず、私の前から消えてしまったのです。

何もしてやれず

〈17〉 心はいつも家族を

長崎市 奥村アヤ子さん(79)

びに行きました。すると、閃光のものとすごい光が、ピカッと垣根の間からきたので、とっさに地面に伏せたと思います。腕に火傷をしていましたが、気がつきませんでした。泣きながら石段を降り、一番下まで降りると、森山さんの馬が死んでいるし、人も死んでいます。やっと通り抜けて、自分の家が見える道路にきた時、新築したばかりのわが家が、見る影もなく崩れていました。

「後からね」と言ってもやらす、母を捜しに行きました。弟を連れて隣組の防空壕に行き家族を待ちました。私には、今も家族を待っています。

とうとう一人ぼっちに

伯母が亡くなり、私と弟は、知らない田舎の遠縁の家に連れて行かれました。重傷の弟を私が病院に連れて行くのです。2人で手をつないで、ゆっくりゆっくり歩いて病院通いです。家では泣かない我慢強い弟が、包帯をはがされる時は泣くのです。弟は、10月23日に亡くなりました。

私はとうとう一人ぼっちになりました。私自身も、髪の毛は抜け、身体も全身の具合が悪いの、病院に行かせてもらえませんでした。

妹の顔は腫れて、変わり果てた姿になって動くこともできず、「水、水」と言っていました。妹が死ぬとは思いませんから

私が行く所はお墓だけでした。毎月9日の命日に、3時間以上かけて1人で歩いて、城山町へ墓

「母ちゃんを呼んでくるから動きなさんなよ」と言って、母を捜しに行きかけた時に、近所のおばさんから妹のことを知りました。

私は、平和の原点は、人間の痛みが解る心を持つことだと話しています。長崎が最後の被爆地になるように、被爆の実相を、多くの人に伝えていきたいと思っています。

妹の顔は腫れて、変わり果てた姿になって動くこともできず、「水、水」と言っていました。妹が死ぬとは思いませんから

私は、平和の原点は、人間の痛みが解る心を持つことだと話しています。長崎が最後の被爆地になるように、被爆の実相を、多くの人に伝えていきたいと思っています。



原水爆禁止2015年世界大会で証言する奥村さん(8月9日)

参りに行きました。兄を待ちました。好きな兄弟は、私の心の支えでした。結婚するまでは、悲しくて苦しくて、大変でした。

原爆と向き合えた

長崎被災協の被爆者の店が開業して間もなくの1958年頃「あなたが働く所があるよ」という紹介され、勤めることができました。みんな同じ苦しみを抱えた被爆者で、支え合って働きました。被爆者の店があったお陰で、私は原爆ときちんと向き合うことができました。

戦争へと続く安保関連法は、絶対に許してはなりません。「外国からの脅威、自分の国は自分で守る、抑止力が必要」などと言っていると、行きつく先は「核兵器を持つ」ということになってしまいます。

私は、平和の原点は、人間の痛みが解る心を持つことだと話しています。長崎が最後の被爆地になるように、被爆の実相を、多くの人に伝えていきたいと思っています。

「原水爆禁止2015年世界大会の記録」(B5判約200ページ)、頒価1500円(送料込)。注文はT113-8464 東京都文京区湯島2-4-4 平和と労働センター16階 日本原水協事務局 Tel 03-5842-6031 Fax 03-5842-6033